

Boethius の *De Consolatione Philosophiae*

菅野正彦

キー・ワード

- 1 ボエティウス (Boethius)
- 2 『哲学の慰め』 (*De Consolatione Philosophiae*)
- 3 神の叡知 (divina intellegentia)
- 4 意思 (voluntas)
- 5 力 (potestas)

概要

ボエティウスはローマの貴族の家庭に生まれたが、陰謀を働いた廉でパヴィアの牢獄に幽閉された。処刑されるまでの間に牢獄の中で書いたのが、この有名な『哲学の慰め』である。「思いを深く真理探究に致す者は / また岐路に迷うことを欲しない者は / 心眼の光りを自己自らの中に向けよ」(III. m. 11. 1-3) と述べているように、獄中で筆を進める彼の精神力と記憶力の強靱さに今更ながら驚かされる。学問を途中で放棄するな、真摯な情熱を抱けと後世の人々を励まし、知の追求と神の愛こそ人間の真の幸福の源泉と明言する。神の叡知、即ち神の摂理 (Providence) を解するために、可能な限り頂上に登らなければならない。行動を引き起こすのは、意思と力である。

I. ボエティウスの生涯⁽¹⁾

中世思想の発展に強く深い影響を及ぼした哲学者、ボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, ca.480-524) は、480年頃ローマの名門貴族の家庭に生まれた。執政官を勤めた父が早くこの世を去ったため、幼いボエティウスはローマ貴族の典型的人物シンマックス (Quintus Aurelius Memmius Symmachus) に引き取られた。後に、彼はシンマックスの娘ルスティキアナ (Rusticiana) と結婚する。血統、才能、財力、あらゆる面に恵まれた彼は、早くから自国の学芸は言うに及ばず、ギリシアの文芸、特に哲学に強く引かれた。言い伝え

によると、ボエティウスは学問の都アテネやアレクサンドリアに遊学して、そこで何不自由なく恵まれた学究生活を送ったと言われている。

5世紀に入ると、ローマ帝国は幾度も蛮族による略奪と破壊とに晒される。410年、西ゴート王アラリック (Alaric, ca.370-410) がローマを陥れ、略奪を欲しいままにした。452年、フン族の王アッティラ (Attila, ca.406-453) がイタリアに侵入し、都市を破壊した。更に、455年、ガイセリック (Geiseric, ca.429-477) がローマを略奪する。476年、ゲルマンの傭兵隊長オドアケル (Odoacer, ca.434-493) がイタリアを支配し、遂に西ローマ帝国は滅亡した。しかし、オドアケルも493年、東ゴート王テオドリック (Theodoric the Ostrogoth, ca.454-526) によって殺害された。

イタリアに君臨したテオドリックは、ローマ帝国時代の伝統的な制度を温存したが、軍務と政務とを峻別し、前者にはゴート人を、後者にはローマ人を配して、用意周到に統治した。自分の王宮に詩人、修辞家、法律家、学者、宗教家等の識者を集めたと言われる。この王はイタリアの伝統を継承し、その地に平和と秩序と繁栄とをもたらした。ボエティウスはギリシア哲学の翻訳に一生を捧げるつもりでいたが、学問を政治に活かす気持ちで「宮仕え」を決めた。テオドリック王の下で、ボエティウスは次第に頭角を現し、510年、王の信任を得て、僅か30歳たらずで執政官に就いた。官を退いても、元老院議員として国政に参与した。522年、二人の息子が揃って執政官に任ぜられ、同年、彼も宰相に選ばれローマ市民の称讃と羨望の的となる。彼はローマを去って、王宮の置かれた任地ラヴェンナ (Ravenna) に向かう。しかし、浮世の幸せは長く続かず、運命の車輪は急降下する。

Dum leuibus male fida bonis fortuna faueret,

Paene caput tristis merserat hora meum. (I.m.17-18) ⁽²⁾

当てにならない運命が、不確かな幸福を授けている間に、

悲しい時が、私の頭を水中に沈めようとしていた。

このように、ボエティウスは幸福の絶頂から不幸のどん底に落ちる。

プラトンの教えに従って、「知恵を探究する人々が国家を支配するようになるか、あるいは政権を握っている人々が知恵を探究するようになれば、国家は幸福になるであろう」⁽³⁾と、ボエティウスは考え、政治の世界へ足を踏み入れた。プラトンやアリストテレス等の哲学を修めた者が、悪事や不正に厳正な態度で臨むのは当然のことであろう。ボエティウスが生きた時代は、栄光に輝いたローマ帝国が滅亡し、動乱の時代を迎えようとしていた。権謀術策の渦巻く政治の世界で、彼の潔癖さが危険を招くのは火を見るよりも明らかである。彼がテオドリック王朝のゴート系の政治家たちと協調できないことは、当初から予想されていた。彼は信念を曲げることなく、元老院で彼らの不正を暴き、公然と弾劾し、感情を逆なでした。

523年、元老院議員のアルビノスが陰謀を巡らしたという重大事件が起きる。ローマを異

民族であるゴート族の支配から開放して、ローマの平和 (pax Romana) を回復することを望んでいるという疑惑が持ち上がった。責任問題はアルビノス一人に止まらず、元老院全体にまで波及する懸念が強まるにつれて、ボエティウスは進んで彼の弁護を買って出た。これは火中の栗を拾う危険な行為であり、これまでボエティウスの栄達に妬みや反感を抱いていた者は、この機に乗じて彼の失脚を狙い、アルビノスと同様、彼を反逆罪で告発する事態にまで進展した。

事の発端は、ビザンツ皇帝ユスティニアヌス (Justinianus I, ca.482-565) に宛てた書状が、途中で奪われたことにある。その中にローマの解放を記した文言が書かれていたという。正当な尋問の手続きが採られることなく、ローマから 500 マイル離れたティケヌム (現在の Pavia) の牢獄に移送され、直ちに幽閉された。元老院は我が身に嫌疑が掛かることを危惧して、彼を弁護することなく死刑と財産没収の判決を下したのである。凄惨で、苛烈な拷問に掛けられた後、525 年、極刑に処せられた。事件の真相が「後世の人々から隠されることのないように」と願い、彼は『哲学の慰め』を書いた。

獄中で書かれた『哲学の慰め』の中に、知の追求と神の愛こそ人間の真の幸福の源泉、と明記されている。彼はプラトンやアリストテレスの哲学書をラテン語に翻訳することを企図したが、この意図は不慮の死によって断たれた。しかし、彼のアリストテレス論理学の紹介は中世初期に大きな影響を与え、キリスト教思想家たちはボエティウスを偉大な教師と尊敬し、彼が重視したローマの自由七学科 (文法, 論理学, 修辞学, 算数, 幾何, 音楽, 天文学) を、中世の大学の教育制度に組み入れた。⁽⁴⁾

著作は幾度も英語に翻訳され、多くの人々に読まれ感動を与えてきた。古くは、アルレット大王の古英語訳、チャーサーの中英語訳、エリザベス女王の近代語訳等がある。

II. 『哲学の慰め』の概要

作品全体の構成は五巻からなり、各巻に詩と散文が長短取り混ぜて交互に並べられている。即ち、第一巻では、詩が 7 編、散文が 6 編、第二巻では詩が 8 編、散文が 8 編、第三巻では詩が 12 編、散文が 12 編、第四巻では詩が 7 編、散文が 7 編、第五巻では詩が 5 編、散文が 6 編である。

第一巻は、次の詩で始まる。

Carmina qui quondam studio florente peregi,
 Flebilis heu maestos cogor inire modos.
 Ecce mihi lacerae dictant scribenda Camenae
 Et ueris elegi fletibus ora rigant.

Has saltem nullus potuit peruincere terror,
Ne nostrum comites prosequerentur iter.
Gloria felicis olim uiridisque iuuentae
Solantur maesti numc mea fata senis.
Venit enim properata malis inopina senectus
Et dolor aetatem iussit inesse suam.
Intempestiui funduntur uertice cani
Et tremit effeto corpore laxa cutis.
Mors hominum felix quae se nec dulcibus annis
Inserit et maestis saepe uocata uenit.
Eheu quam surda miseros auertitur aure
Et flentes oculos claudere saeua negat.
Dum leuibus male fida bonis fortuna faueret,
Paene caput tristis merserat hora meum.
Nunc quia fallacem mutauit nubila uultum,
Protrahit ingratas impia uita moras.
Quid me felicem totiens iactastis amici?
Qui cecidit, stabili non erat ille gradu. (I. m. 1. 1-22)

かつては輝かしい情熱で詩を作った私が / おゝ、泣き濡れて悲しい曲を始めねばならぬ、 / 見よ、嘆きのミューズたちが書くべきことを私に囁く、 / そして悲歌はまことの涙で私の頬を洗う。 / 恐ろしい身の上もミューズたちをだけは追ひ払ひ得ない、 / いつも伴侶として彼女らは私についてくる、 / 幸福で新鮮だった青春の日の栄光に依つて / 今や悲しい老人としての私の運命が慰められる。 / 思へば禍に早められてあわただしく老が来 / 苦悩はめつきりと私に年を取らせた、 / 時ならぬ白髪は私の頭上を覆ひ / 力の尽きた体の皮膚はたるんで震へる。 / 死は幸ひだ、若しそれが生を楽しんでる間には来ず / そして悲しめる人々の招きにはしばしば応ずるなら。 / しかし、おゝ、死はあはれな人々の叫びに耳を傾けず / 又涙する眼を閉じてやることを残酷にも拒んでいる。 / 仇な幸福がうつろひ易い恩恵を私に与えてる間に / あの悲しい時が来て私の一生は殆ど沈められた、 / 今や幸運は偽の面を捨てて暗い面となり / 呪はしい生をいやいやながら私は続けて行く。 / 友よ、お前たちは何故あのやうにしばしば私の幸福を口にしたのか、 / 落ちた者、それは安定した位置にいたのではなかったのに。⁽⁵⁾

少し修正を加えて見ると、「恐ろしい身の上も」は「(いくらついて来るなど) 脅してみても」、 「悲しめる人々」は「悲しい時に」、 「死はあはれな人々の叫びに耳を傾けず」は「死は耳が聞こえず衰れな人々を避け」、 「あの悲しい時が来て私の一生は殆ど沈められた」は「あ

の悲しい時が私の頭を殆ど水の中に沈め、「今や幸運は偽りの面を捨てて暗い面となり」は「暗い幸運が偽りの顔に変えた今」という意味になるであろう。

続いて、哲学婦人がボエティウスの所に現れて、詩の女神たちを追い払う。彼女は彼の悲壮な状態を見て、優しく話し掛けて、彼の心を癒すことを約束する。彼は、哲学婦人であることを認識する。彼女は自分を愛し、仕えてくれる者を何時でも助けたように、彼に手を差し伸べることを約束する。彼はこれまでやってきた話をする。特に、現在の悲惨さの諸々の原因を話す。彼女は囚人の悩みの源は、彼自身の中にあると説く。

「何故苦しんでいるのか不思議に思う」「何が万物の終極目的であるか」「全自然の意図は何を目指しているか」「人間とは何であるか」という問いを彼に突きつける。

第二巻では、運命の本性を説明する。運命は盲目の女神であること、禍福両面を備えていることを話す。「不幸中の最大の不幸は、昔は幸福であった」ということだ。富、栄位、権力、名声には本来の善は含まれていないことを明らかにする。「本当にあなたがたには身に具わっている固有の善がないので、あなたがたは外部の縁遠いもののなかにあなたがたの善を求めますか。……あなた方は精神において神に似ているのに、あなたがたのすぐれた自然(本性)をきわめてつまらないもので飾りたて、あなたがたの創造者にどれほど不正を加えているかを理解していません。」

哲学婦人はボエティウスに幸運の女神の本性と習性の何たるかを想起させる。彼女は「変化するのが女神の本性である」ことを示す。彼女は囚人に以前の幸せと現在持っている貴重な贈り物(家族、友人)を思い出させる。彼は「最も悲惨なことは、失った喜びを思い出すことだ」と言う。彼女は唯一の真の喜びは、逆境に遭遇して動じないことだと答える。彼女は、人間が手に入れたいと求めるものを大事にして、物品を所有することは、決して真の信頼や安全をもたらさないと結論づける。彼女は更に続けて、幸運の女神の名誉や権力の贈り物は、一時的で、それ自体善きものでないと言う。優れた公共の仕事をした人が得た栄誉といえども、大した価値はない。彼女は、不運の方が幸運よりも有益だと言う。幸運は人を欺き、不運は色々と教えてくれるから。

第三巻では、真実の幸福が探究される。富、栄位、権力、名声、快樂によって、人々は真実の善に到達することは不可能である。万物の創造者である神は、至高で完全な善に満ちている。真の幸福は、至高の神に存在する。

哲学婦人は、ボエティウスを真の幸福へと導く。彼女は、万人が生まれながらに希求する至高善と完全な幸福は何かを定義する。次に、彼女は人々が真の善と誤解している虚偽の善を列挙する。自然は、人々を真の善へと向けるが、過誤は不完全なもので彼らを欺く。特に、富は人を満足させない。名誉は真の善でもないし、真の幸福への道でもない。権力は幸福を保証するものではない。真の幸福は、名声に見いだされない。快樂は、人々を幸福にしない。これらの限られたものは、一時的で、幸福をもたらさない。反対に、しばしば害を及ぼすものだと結論づける。彼女は、偽りの幸福とその原因を論じて話を終える。

次に、彼女は真の幸福と至高善を話題にする。彼女は、ポエティウスに至高善と最高の幸福は神に見い出され、神であると教える。彼女は、神は唯一であり、神は万物が向かう目標であることを示す。彼女は、神は善によって宇宙を支配し、被造物は全て神に服することを示す。

第四巻では、悪は無であるという主題を巡って話が展開する。善人は常に力を持つ。悪人は常に蔑視される。悪は罰せられ、徳は報いられる。善人には幸福が、悪人には不幸が与えられることを説く。

人間の全行動を引き起こすものは、意思と力である。人間の意思は、幸福を目指す。善行には良い報いが、悪行には悪い報いがある。全ての善人は、まさに善人であるということによって、幸福になる。善人の報いは、神々になることである。誠実を放棄して人間であることをやめる者は、神の状態へ移ることができないので、野獣に変わる。

ポエティウスは、神によって造られ、神によって支配されている世界に、なぜ悪が存在し、成功を収めるかに見えることを語る。彼女は、善人が真の力を持ち、悪人が持たないことを示す。善人は常に報われ、悪人は常に罰せられる。彼女は、悪人は無力で、無慈悲なほど不幸であると言う。しかし、彼はなをも、全能の神は時に悪人に幸福を授け、善人に悲しみをもたらすように見えると語る。彼女は摂理と運命について講義する。彼女は人の世事では、不正ででたらめに思えるものが、善人に対して摂理によって向けられていることを示す。彼女はポエティウスの要請で、すべての幸運は善である、という主題を再度説明する。

第五巻では、摂理、運命、偶然、予知、自由意思を問題にする。

彼女は偶然の問題を論ずる。彼女は理性的自然は必然的に自由意思を持たなければならないと言う。ポエティウスは、神の先見性と人間の自由意思は相容れないと言う。彼女は、神と人の知覚に相違があることを力説して、神の摂理は意思の自由を排除しないと言う。この神秘を理解するために、人間の理性は神の叡知の力を沈思黙考しなければならない。彼女は、単純必然と条件必然とを区別して、摂理と自由意思の難問を解決する。

Ⅲ. ポエティウスの「叡知」‘intellegentia’を中心に

Chaucer は『第二の尼僧の話』(*The Second Nun's Tale*)の中で、神の存在の中には三つの位格と対照させて、人間の三つの知慧というのは記憶力、創造力、理解力である、と Cecilia に言わせている。

Right as a man hath sapiences three--

Memorie, engyn, and intellect also--

So in o beyng of divinitee,

Thre persones may ther right wel bee. (SN, 338-41) ⁽⁶⁾

「人間は三つの知恵、即ち記憶力、創造力、理解力を持っているように、神の存在の中には三位がある。」

しかし、Benson や Skeat 等が指摘しているように、Chaucer が依拠した原典 ‘*Legenda Aurea*’ の内容とは少し異なっている。⁽⁷⁾

Respondit Cecilia: Sicut in una hominis sapientia sunt tria, scilicet ingenium, memoria, et intellectus, sic et in una diuinitatis essentia tres persone esse possunt.⁽⁸⁾

セシリアは次のように答えた。「人間の知恵の中に、記憶力、創造力、理解力の三つがあるように、そのように神の本質の中に三位（ペルソナ）が存在し得る」

彼らは ‘slightly modifies’ とか ‘not quite exact’ と注で述べているのである。従って「人間の知恵には三つ、即ち記憶力、創造力、理解力がある」、又は「人間の知恵は三つから構成されている」と訳すほうが原典に近いであろう。

MED は ‘sapience’ を「心的機能」‘a mental faculty’, ‘memorie’ を「記憶の働き」‘the faculty of memory’, ‘emgyn’ を「生得的能力、知力、才能、技」‘innate ability or intelligence, talent, skill’, ‘intellect’ を「真理を認識する力」‘the capacity for recognizing truth’ の意味に解している。‘intellect’ の語源に簡単に触れると、これは ‘intel’ と ‘lect’ とに二分され、「..の間」と「集める・選ぶ・読む」という意味で、文字通り「..の間を読む」である。従って、収集・選択・解読の能力を指している。

‘The Parson's Tale’ の「傲慢さについて」(*De Superbia ‘Pride’*) では、次のように述べられている。

Certes, the goodes of nature stonden outhur in goodes of body or in goodes of soule. Certes, goodes of body been heele of body, strengthe, delivernesse, beautee, gentrice, franchise.

Goodes of nature of the soule been good wit, sharp understondynge, subtil engyn, vertu natureel, good memorie. (450-53)

「確かに、自然のよいものは肉体のよいものか、魂のよいものかのいずれかに存しています。

確かに、肉体のよいものとは、肉体の健康、力、敏捷さ、美しさ、高貴な生まれ、束縛されない自由の身等であります。

魂の生まれつきよいものとは、優秀な感性、鋭い理解力、巧みな技術、生命力、優れた記憶力などであります。」

MED は ‘wit’ を「感覚機能」‘sensitive faculty’, ‘vertu natureel’ を「生命力」‘physical

strength, life-sustaining faculty' と解している。

『悪徳と美德の書』(*The Book of Vices and Virtues*) はフランス語から翻訳されたものである。Skeat は原典から, 'cler sens, sotil engin, bone memorie, les vertuz natureles' のように単語のみを記している。英語では次のように訳された。

The goodes that a man hath in his soule is cler witt to vnderstonde wel, sotil vnderstondynge for to fynde wel, goode thynges of long mynde for to withholde wel, the bodily vertues. ⁽⁹⁾

人間の魂の中に持っているいいものは、良く理解する鋭敏な感覚、優れた発見をする巧みな能力、よく保つために長続きする精神という優れたもの、生まれながらの力」である。

'Li bien de nature' は 'goodes', 'l'ame' は 'the soule' と、「鋭敏な感覚」 'clersens' は 'wit' と訳されるのが普通であった。'engin' は「物を創り出す、或いはいい発見をする巧みな能力」 'sotil vnderstondynge for to fynde wel' で、面白いのは、「記憶力」 'memorie' の訳で、「よく保つために長続きする精神という優れた物」 'goode thynges of long mynde for to withholde wel' である。'Long' は「何時までも続く」 'abiding, enduring' (MED) という意味である。人間が精神の中に持っている「もの」は、理解する力、創造する力、記憶する力、生命力である。'Bien' と 'goodes' から、これらの語は「良い」と「物」と二つの意味を備えている。これらの能力は、一見優れた能力と思われるが、これらは全て自慢や、傲慢さや、法螺のものととなり、人間にとってマイナス要因となり、司祭によって否定されるのである。その否定の理由を要約すると、「肉体は魂の大敵である。肉体が健康であれば罪に陥る危険が大きい。肉体が強ければ強いほど、魂は苦悩にあえぐ。高貴な生まれを誇ることも愚かなことである。肉体の高貴な生まれが、精神の高貴さを取り去る」(457-63) ということになる。本心か否かは別にして、Chaucer といえども中世思想の大義名分である「肉体蔑視」から逃れることはできない。

ボエティウスの『哲学の慰み』の中で、「神の精神」 'divina mens' について、以下のよう述べている。

Haec (divina mens) in suae simplicitatis arce composita multiplicem rebus regendis modum statuit. Qui modus cum in ipsa diuinae intellegentiae puritate conspicitur, prouidentia nominatur. (IV . p.6.25-28)

Ceste pansee ordenee en latour--c'est en la haultece--de sa simplece establist mainte maniere diverse aus chosez quil sont a faire. Ceste maniere, quant elle est regardee par nous en la purite meismes du devin entendement, est apelee pourveance; (IV . p.6.26-29) ⁽¹⁰⁾

And thilke devyne thought that is iset and put in the tour (that is to seyn, in the heighte) of the

simplicite of God, stabiſsith many maner gises to thinges that ben to done; the whiche manere whan that men looken it in thilke pure clenness of the devyne intelligence, it is ycleped purveaunce; (IV . p.6.47-53)

「神の単純性の塔に格納された神の精神が、正しく導かれる物に様々な様式を設定した。これらの様式が神の叡知の純粋さで考察されるとき、それは摂理と名づけられます。」

『広辞苑』は、摂理を「神が人の利益を慮って世の事すべてを導き治めること」、また「自然界を支配している理法」と定義している。⁽¹¹⁾ ‘Haec’ は ‘divina mens’ を受ける。それを Chaucer は ‘thilke devyne thought’ と訳している。また、‘thought’ は「純粋な思考、神聖な精神、神」 ‘pure thought, the devine mind, God’ (MED) の意味で、特に「神」と同一視される点に注目したい。Chaucer の ‘simplicite’ は「単純性」「不動」 ‘singleness of nature, unity, immovability’ (MED) の意味である。

Ipsum quoque hominem aliter sensus, aliter imaginatio, aliter ratio, aliter intellegentia contuetur.

(V . p.4.82-84)

Neis homme meismes autrement le regarde sens, autrement ymaginacion, autrement raison, autrement intelligence. (V . p.4.84-86)

And the man hymself, ootherweyes wit byholdeth hym, and ootherweys ymaginacioun, and otherweyes resoun, and ootherweies intelligence. (V . p.4.161-64)

「人間自身を感覚、創造力、理性、叡知はそれぞれ異なって眺める。」

ここで興味深いのは、「感覚と創造力と理性と叡知とでは、人間自身もそれぞれ異なって見える」ということである。

ボエティウスによると、‘wit’ (L.sensus), ‘ymaginacioun’ (L.imaginatio), ‘resoun’ (L.ratio), ‘intelligence’ (L.intellegentia)’ はこの順序で優劣の段階をなしている。

Intellegentiae uero celsior oculus existit; supergressa namque uniuersali ambitum ipsam illam simplicem formam pura mentis acie contuetur. (V . p.4.88-91)

Mais l'euil de l'intelligence est plus haus; car elle seurmonte l'avironnement de la communité et regarde avec ce, par pure soutilite de pensee, celle meismes forme simple de l'homme qui est pardurablement en la pensee divine. (V . p.4.89-92)

But the eighe of intelligence is heyere, for it surmountith the envyrounyng of the universite, and loketh over that bi pure subtilte of thought thilke same symple forme of man that is perdurablely in the devyne thought. (V . p.4.162-66)

「しかし、叡知の目は他のものより高い。従って、普遍概念の領域を超えて、叡知の目は、心の

純粹な目で、あの単純な形相そのものを直観する。」

*MED*は「叡知」‘intelligence’を「普遍的真理を理解する力」‘the capacity for comprehending general truth’と定義している。

「感覚」は岩にへばりつく牡蠣や貝類に、「想像力」は動き回る動物に、「理性」は人間に、「叡知」は神のものである。

18世紀にフランスの哲学者・社会改良家・作曲家である J.J. Rousseau (1712-78) が「自然への復帰」‘a return to nature’を提唱したことは、よく知られている。人間の本来の姿、又は原始的状态を取り戻すことを主張したのである。実は、人間が失いつつある野性を取り戻せ、という意図が含まれていたことが、この分類からよく理解できる。また、理性と想像力との関係が、何時の時代にも議論されるのも納得できるであろう。

ratio uero humani tantum generis est sicut intellegentia sola diuini. (V . p.5.17-18)

Mais raison est tant seulement de l'umain lignage, si comme seule intelligence est de divine nature.

(V . p.5.20-21)

But resoun is al oonly to the lynage of mankynde, ryght as intelligence is oonly the devyne nature.

(V . p.5.34-36)

「叡知が神性のみのものであるように、理性はただ人間のみのものである。」

上位の把握力は、下位の把握力を含んでいるが、下位の把握力は決して上位の把握力に及ばない。上位が下位を理解することは可能であるが、逆は不可能である。感覚や想像力は、理性を超えることはできない。

ここからが問題である。すると、神の叡知は人間の理性を理解することはできるが、その逆は不可能である、という問題が起こる。

Quid igitur, si ratiocinationi sensus imaginatioque refragentur, nihil esse illud uniuersali dicentes quod sese intueri ratio putet? (V . p.5.21-24)

Que sera donques, se senset ymaginacion contredient a raison et dient de celle chose universele que raison cuide veoir que ce est niant? (V . p.5.25-27)

But how schal it thanne be, yif that wit and ymaginacioun stryven resonyng and seyn that, of thilke uniuersel thingis that resoun weneth to seen, that it nis ryght naught? (V . p.5.43-46)

「では、もし感覚と創造力が、理性が直観すると思っているあの普遍概念は無であると主張して、熟慮に反抗すれば、一体どうなるか。」

Simile est quod humana ratio diuinam intellegentiam futura, nisi ut ipsa cognoscit, non putat intueri.
(V . p.5.39-41)

Semblable chose est a ce que nous voulons ici dire, c'est assavoir que raison humaine ne cuide pas que la divine intelligence regart ou cognoisse les chosez a avenir, fors que si comme raison meismes humaine les cognoist. (V . p.5.41-44)

Semblable thing is it, that the resoun of mankynde ne weneth nat that the devyne intelligence byholdeth or knoweth thingis to comen, but ryght as the resoun of mankynde knoweth hem. (V . p.5.76-80)

「人間の理性は、神の叡知が将来を直観すると思わないで、自身（理性）が認識する方法以外の何物でもない、ことに似ている、」

冒頭で述べたように、人間は傲慢になり、神が前もって設えられた摂理を忘れて、神の叡知を人間の次元に引き下げて、身勝手に推測するのである。そこで、次のような非常に重要な問題を投げかける。

Si igitur uti rationis participes sumus, ita diuinae iudicium mentis habere possemus, sicut imaginationem sensumque rationi cedere oportere iudicauimus, sic diuinae sese menti humanam submittere rationem iustissimum censeremus. (V . p.5.46-50)

Se nous donques peussions avoir le jugement de la divine pensee, si comme nous sommes parçonner de raison, si comme nous avons jugié que il couvient que ymaginacion et sens soient au dessouz de raison, aussi jegerions nous que tres droituriere chose seroit que raison humaine se sousmeist a la divine pensee.

(V . 5.49-53)

But certes yif we myghten han the jugement of the devyne thoght, as we ben parsoners of resoun, ryght so as we han demyd that it byhovith that ymaginacioun and wit ben bynethe resoun, ryght so wolde we demen that it were ryghtfull thing that mannys resoun oughte to summytten itself and to ben bynethe the devyne thought. (V . p.5.87-95)

「なるほど、我々は理性の分け前にあずかる者ではあるが、もし神の精神の判断を持つことができるならば、創造力と感覚は理性に服従するのが当然であると判断したと同様に、人間の理性は神の精神に服するものが最も公正だと考えるべきでしょう。」

しかし、ボエティウスは少し前に、

cum ipsum bonum beatitudo sit, bonos omnes eo ipso quod boni sint fieri beatos liquet. (IV . p.3.26-28)
comme biens meismes soit beneurté, certaine chose est que tuit li bon, par ce meismes qu'il sont bon, sont fait beneurté. (IV . p.3.23-25)

so as good [hytself] is blisfulnesse, thanne is it cler and certein that alle gode folk ben imaked blisful for thei ben gode; (IV . p.3.45-47)

「善それ自身が至福であるから、全ての善人は善良であるので、裕福になるのは明白です。」

と述べている。

Sed qui beati sint deos esse conuenit. Est igitur praemium bonorum quod nullus deterat dies, nullius minuatur potestas, nullius fuscet improbitas, deos fieri. (IV . p.3.28-31)

Mais cil qui beneuréz sont, il couviant que il soient dieu. Donques est itieux li loiers des bons: que nul jour ne le destruira, nulle mauvaistié ne l'occurcira, ne puissance de nul ne l'apeticera, c'est a savoir estre fait diex. (IV . p.3.25-28)

and thilke folk that ben blisful it accordeth and is covenable to ben goddes. Thanne is the mede of good folk swych that no day ne schal empeiren it, ne no wikkidnesse schal derke it, ne power of nowyght ne schal nat amenusen it; (IV . p.3.48-53)

「しかし、裕福な人々が神々であることは意見が一致している。それ故、いかなる日も弱めず、いかなる人の力も減ぜず、いかなる人の邪悪も濁さない善人の報いは、神々になることである。」

裕福な人々は神々であり、善人の報いは神々になることである、と述べてい。ここで「神になる」ということは、一体どういう意味か。想像を逞しくすると、神の叡知を理解しようと、一生懸命勉強する人は善人になるという意味であろうか。

Ita fit ut qui probitate deserta homo esse desierit, cum in diuinam condicionem transire non possit, uertatur in beluam. (IV . p.3.67-69)

Dont il s'ensuit que cil qui deguerpist proece et delaisse a estre hom, comme il ne puisse pas trespasser en condicion divine, que il soit muéz en beste. (IV . p.3.62-64)

Than folweth it that he that forleth bounte and prowess, he forleth to ben a man; syn he ne may nat passe into the condicion of God, he is torned into a beeste. (IV . p.3.123-26)

「正直を放棄して人間であることをやめる者は、その点だけで、神の状態へ移ることができないので、動物に向かう。」

上の 'improbitas' 「不正・邪悪」の反意語 'probitas' 「正直・誠実」は、「哲学・学問」ほどの意味で、分かりやすく言えば、「知を愛することを止めた人は」動物になり下がるのである。動物にならない為に、

Quare in illius summae intellegentiae cacumen, si possumus, erigamur. (V . p.5.95-98)

Par quoy, se nous poons, eslevons nous en la hautece de celle souveraine divine intelligence, car illee verra raison ce que elle ne puet regarder en soy meismes. (V . p.5.53-55)

For whiche yif that we mowen (as who seith that, if that we mowen, I conseile that) we enhance us into the heighte of thilke soverein intelligence; (V . p.5.95-98)

「もし可能ならば、最高の（神の）叡知の頂上に登ろうではないか。」

と、ボエティウスは我々を叱咤激励してくれる。しかし、実際に「登る行動を起こす」には、欠くことができないものが二つある。即ち、意思と力である。

Dum sunt quibus omnis humanorum actuum constat effectus, uoluntas scilicet ac potestas, quorumsi alterutrum desit, nihil est quod explicari queat. (IV . p.2.12-14)

Deus chosez sont par quoy l'euvre de touz les faiz humains est parfaite, c'est a savoir vouloir et pooir et, se li un de ces deus fault, n'est riens qui puisse estre fait. (IV . p.2.13-15)

Two things that ben in whiche the effect of alle the dedes of mankynde standeth (that is to seyn, wil and power) ; and yif that oon of thise two faileth, ther nys nothing that may be doon. (IV . p.2.23-26)

「人間のすべての行動を引き起こすものは、即ち、意思と力であることは周知の事実であるので、もしこの二つのうちどちらか一つが欠ければ、事をうまく運びうるものは何もない。」

何かを得ようと欲して、手に入れられない人は欲したものを獲得する能力がないのだ。逆に、欲したことを成し遂げる人は、能力があるということになる。このように、ボエティウスは人間の意思 (uoluntas) と力 (potestas) とを強調する。神の叡知の頂上に登るには、当然、意思と力が要求されるのである。ゲーテの『ファウスト』は、「永遠なる女性はわれらを引きて昇らしむ」というコーラスで終わっている。

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichniß;

Das Unzulängliche

Hier wird's Ereigniß;

Das Unbeschreibliche

Hier ist es gethan;

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan. (*Faust II*) ⁽¹²⁾

すべて無常のものは

ただ映像にすぎず。

及び得ざるもの

ここには実現せられ、
名状しがたきもの
ここには成し遂げられぬ。
永遠なる女性は
われらを引きて昇らしむ。

マルクスも『資本論』の中で、「明るい頂上に達する望みを持てる」と、同趣旨のことを述べている。

Es gibt keine Landstraße für die Wissenschaft, und nur diejenigen haben Aussicht, ihre lichten Höhen zu erreichen, die die Mühe nicht scheuen, ihre steilen Pfade zu erklimmen. (*Das Kapital*)⁽¹³⁾

学問には大道はない。そして、ただ学問の険しい路をよじ登る労をいとわない者だけが、明るい頂上に達する望みを持てるのだ。

再度、冒頭の言葉を引用しよう。

神の純粹性の中に格納されている神の精神が、正しく導かれる物に様々な様式を設定した。これらの様式が神の叡知の純粹さで考察されるとき、それは摂理と名付けられます。

神の精神が様々な様式を定めた。その様式は、神の純粹性の中に納められている。摂理とは、これらの様式が、神の叡知の純粹さで考察されるときにそう呼ばれるのである。我々は限られた時間の中で生きている。この限られた生の中で、悩み、苦しみ、楽しみながら精一杯生きて行く。苦楽の中で生きる人間に、神は等しく理性を与えた。この理性（言葉）のお陰で、天上の神の格納庫に納められている様々な様式を手に入れるために懸命に努力しなければならない。人間は神慮を忘れて、悪に走ることがある。しかし、元々悪は無であり、無力なのである。感覚、想像力、理性、叡知は、貝類、動物、人間、神それぞれの特性であるが、人間のみが神の摂理を解する能力を備えている。神の配慮を理解するため、人は高みに登らなければならない。そのためには、強靱な意思と力とが必要なのである。高みに登るとは、幸福になることである。幸福になることは、神々になることでもある。神になるために、上に登らなければならない。限られた人の世で、神を愛し知を愛せよとボエティウスは獄舎の中で懸命に我々に叫び続けた。

(September, 2003)

注

- (1) ボエティウスの「生涯と概要」は、渡辺義雄訳『ボエティウス—哲学の慰め』(筑摩書房, 1969), 畑中尚志訳『ボエティウス—哲学の慰め』(1938; 岩波文庫, 1958), 及び *The Consolation of Philosophy*, tr. Richard Green (1962; Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, rpt.1982), を主として参照した。訳は全てこの版による。
- (2) ボエティウスからの引用はすべて *Boethius: The Theological Tractates and the Consolation of Philosophy*, eds. H.F. Stewart and E.K. Rand (1918; LCL, London/Cambridge, Mass. rpt. 1968) による。
- (3) Richard Green, *op.cit.*, p.xii
- (4) Gerard O'Daly, *The Poetry of Boethius* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1991), p.11.
- (5) 畑中尚志訳, 上掲書, pp.9-10.
- (6) 引用は全て *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. L.D. Benson (Boston: Houghton Mifflin, 1987) による。
- (7) Benson, *op.cit.*, p.945, 及び W.W. Skeat (ed.), *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (Oxford, 1961), p.410
- (8) G.H. Gerould, "The Second Nun's Prologue and Tale" : *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, ed. by Bryan, W.F. and Germaine Dempster (1941; Atlantic Highlands, N.J.: Humanities Press, 1958), p.674.
- (9) *The Book of Vices and Virtues*, ed. W.N. Fraccis, EETS 217 (1942), 19-21.
- (10) V.L. Dedek-Héry, "Boethius's *De Consolatione* by Jean de Meun, *Li Livres de Confort de Philosophie*", *Medieval Studies*, 14 (1952), pp.165-275.
- (11) 『広辞苑』新村出編 (岩波, 1998).
- (12) Johann Wolfgang von Goethe, *Faust II*, Herausgegeben von J. Kiermeier-Debre (Deutscher Taschenbuch Verlag, 1997), p.352.
- (13) 『古典のことば』(岩波文庫編集部, 1995), p.210.